本日のプログラムはすべてチェロ四重奏にて演奏される。

ハイドン（D.ムーア編）**：チェロ協奏曲 第 1 番**

チェリストにとっては今や定番中の定番だが、筆写譜が発見されたのは 1961 年で、翌年チェコの名チェリスト、ミロシュ・サードロにより蘇演された。作曲時期は1765～67 年頃で、ハンガリーの名門貴族エステルハージ侯に仕えていたハイドンが、同じくエステルハージ家に仕えていたチェリストのヨーゼフ・ヴァイグルのために書いたとされる。全 3 楽章からなり、リトルネロ形式などバロック音楽の名残も見られるが、両端楽章はソナタ形式で書かれており、バロックと古典派が融合したかたちになっている。ハイドンならではの優雅な旋律美を堪能できる初期の傑作である。

チャイコフスキー（D.ムーア編）**：ロココの主題による変奏曲**

「ロココの主題」とあるが、チャイコフスキーのオリジナル。序奏に続いて主題と 7 つの変奏が展開する。1876～77 年にかけて、親交のあったドイツ人チェリスト、ヴィルヘルム・フィッツェンハーゲンのために作曲され、彼に献呈された。チェロ独奏と管弦楽という編成だが、タイトルに「協奏曲」の名は与えられていない。単一楽章構成で、本来は変奏が 8 つあった。フィッツェンハーゲンが初演時に第 8 変奏をカットし、曲順も変えてしまったが、作曲者もそれを黙認したことから、現行のバージョンとなった（近年は原典版が演奏されることもある）。

サン＝サーンス（R.クレム編）**：チェロ協奏曲 第 1 番**

サン＝サーンス 37 歳、1872 年の作。同時期には歌劇《サムソンとデリラ》等も書かれた。3 部構成だが、間断なく演奏される。第 1 部はソナタ形式。インパクトのあるオーケストラの一打で始まり、痺れるような魅力ある第 1 主題、緩やかに歌う第 2 主題が続く。第 2 部は愛らしい主題の短いスケルツォ。第 3 部には再び第 1 部の第 1 主題が回帰して朗々と歌い、全体の統一が図られている。

シューマン（R.クレム編）**：チェロ協奏曲**

シューマン唯一のチェロ協奏曲。交響曲第 3 番《ライン》等も生まれた 1850 年の作で、シューマンのデュッセルドルフ時代を代表する秀作。初演は没後 10 年を経た 1860 年。3 楽章構成だが、切れ目なく演奏される。チェロは管弦楽と対立するのではなく、管弦楽と調和する一楽器として扱われているため、存在感を示すには高度な技術が必要とされる。第 1 楽章はソナタ形式。弦のピチカートで始まり、すぐにチェロがロマンティシズムあふれる第 1 主題を奏する。さらに夢見るような第 2 主題が続き、非常に短い第 2 楽章を経て、第 3 楽章は自由なソナタ形式。冒頭から伴

奏の和音と対話するようにチェロの主題が始まり、最後には伴奏付きのカデンツァが置かれている。